

私と文学・05

遠野方言あれこれ

女性落語家六華亭遊花、芥川賞作家若竹千佐子。ともに岩手県の遠野出身。岩手の南東部に位置する遠野は、方言で語られる民話の里としてよく知られている。昨年、六華亭遊花の話聴く機会があった。民話を落語に換え語って見せ笑いが止まらなかった。同じころ、浅田次郎「母の待つ里」を読んだ。作中に岩手の片田舎で、母の語る民話を聴きながら静かに夜を過ごす場面が出てくるが、懐かしさがこみ上げ郷愁を誘う。著者は親しんできた柳田国男「遠野物語」への敬意を込めたという。

かたや若竹千佐子は「おらおらでひとりいぐも」で、主人公の独白を方言で書いている。本作がドイツ東部の方言を織り込み、ドイツ語に翻訳されたという。150年前、言葉の標準化を図るため

各地の民話を集め「グリム童話」を編集したドイツ。ドイツにはごく自然にいろんな言語を混ぜて喋っている人がたくさんいると聞くが、方言を見直そうとする時代の雰囲気は漂っているのだろうか。どこか日本と響きあうものを感じるのだが。

標準語が定まっていなかった明治の初めの日本にはこんな話がある。遠野出身の男が会津出身の男に脅され、金を巻き上げられそうになっている。が、遠野の男には「アンマリ ヒヨンタな訛りで、オレア ワンツカもワガンネ」と脅されていることが皆目判らない。井上ひさしの「國語元年」に出てくる一コマだ。標準語では紡ぎ出せない面白おかしさがあり、落語のネタになりそう。むがすあつたずもな 遠野のおどこなア 会津のおどこな ジエネココヨ コシエ！ とオドされだんだん けんとも……どんどはれ (其田敏美)

文友の部屋

＊「仙台の地図の上で文学散歩しよう」に参加して、子供のころを思い出した。その頃は宮町の東側に住んでいた。藤村が仙台にいた頃は小田原遊郭と言われていた辺りだ。以前「じゃんけんぼん」を「いしけんぎ」と言っていたことを思い出した。もしかすると「いしけんぎ」は遊郭言葉と関係があるのかしら。藤村とジャンケンが地図の上で鉢合わせした。(N)

止めた。すごい人とは思いつつもまさか朝ドラになるとは。十数年前高知の観光バスに乗って牧野植物園を見た。あまり植物のことはわからないままにスルーしてしまったのだが仙台エココザだけは記憶に残っている。(ぼんちゃん)

「文友の部屋」の原稿募集

150字程度で、会員のみならずの声を寄せください。おススメの文芸作品や、映画・演劇などを見た感想などジャンルは問いません。イニシャルでの投稿も可です。

文学の杜 仙台文学館 友の会会報 第72号

令和5年7月20日発行

仙台文学館友の会(仙台文学館内) 〒981-0902 仙台市青葉区北根2丁目7の1 電話 022(271)3020 仙台文学館のホームページ https://www.sendai-lit.jp/

2023年度スタート

新型コロナウイルス禍後に向けて

仙台文学館友の会の2023年度総会はゴールデンウィークの5月3日に文学館講習室で開かれた。初めに渡辺祥子会長から、新型コロナウイルス禍後の新しい活動に期待しているという挨拶があった。その後事務局の伊藤美菜子さんが司会、渡辺会長が議長に就いて議事が始まった。

役員とサポーターが紹介された。その他では、出席者から新しい活動について発言があり、会員の高齢化に沿う行事の提案や意見を募っていきたくと、渡辺会長と事務局が応答した。また、読書会担当から隔月で開いている例会への気軽な参加呼びかけが、会報編集委員から会員のコーナーの原稿募集の声かけがあった。参加者は12名だった。

- なお、役員、サポーターは次の方々。
▽会長 渡辺祥子
▽副会長 寺嶋信
▽幹事 一文字ひろみ
▽監事 近田裕子、長沼和子
▽サポーター 池田ミチ、尾形光子、加藤裕子、佐藤満子、佐野のぶ
▽事務局 伊藤美菜子



議案の討議では2022年度の事業報告と収支決算、監査報告を承認、2023年度事業予定案、予算案について、原案通り出席者全員の挙手で可決され、

たどるいわさきちひろの世界」について学芸員による解説講座があった。ピエゾグラフの意味から始まった解説は興味深く、淡いメルヘン調の幸福な絵本画家と思ってきた、いわさきちひろの別な姿が浮かび上がり、作品世界を見直さなければと思った。

風と歩こう 21



Photo by Ryuji Sasaki

好きな作家の本が、やっと文庫化された。「図書館で借りれば」と言う方もいるだろう。でも、図書館の本を煮物しながら手にするのははばかられる。そういうわけで文庫化を待つことになる。携帯をマナーモードにしてバックの底に、少し厚めの一冊のカバーをはずしてその上に入れる。文学館に着いたら「ひざしの杜」で早めのランチを注文し、本を開く。混み始めるまで、読みながらランチを楽しむ。お行儀が悪いかもしれないが、心えられない至福の時間だ。「家では読まないの」と聞かれたら「もちろん読むよ」と答える。でも家には小さな邪魔が度々入る。だから、ちよつと高めのチヨコレイトやケーキの代わりに、自分への褒美に文学館で本を読む。

食後は情報コーナーのカウンター席に移動する。正面から差し込む陽射しが、左の台原の西の端にかかる頃、本を閉じる。閉じようとする。この章が終わるまで、後もう少しと思いながら。(和)

心の枠を外して

会長 渡辺 祥子

コロナ禍の影響を受け、友の会活動も、中止、自粛など様々な制限下に身を置くこととなったこれまでの3年間。重く息苦しい期間ではありましたが、新年度はようやく光が見えてきた中での総会の開催が叶い、嬉しく思っております。

この数年友の会としては、「不自由な中でもこれが出てきたものがあるよね」「不自由だからこその見えてきたものがあるよね」など、当たり前の中にあつた大切なものの再確認を、文学や文学館を通して行い、発信して参りました。

これからは、これらの貴重な気付きを大切に携えつつ、しかしその一方で、知らず知らずのうちに枠を設けていた心を解放していきたいと思えます。とはいっても、できることに限りはあります。しかしそれを先立たせずに、自由な発想で要望をお寄せいただきたい、新たな可能性を模索していきたい、と考えております。2023年度も、皆様と文学を通した様々な交流が出来ることを楽しみにしています。

編集後記

仙台文学館友の会会報「文学の杜」第72号をお届けします。

▽仙台駅から東西線地下鉄に乗った。3つ目の国際センター駅で下車。出るとすぐに羽生結弦さんと荒川静香さんの大きなパネルがあった。おりしもその日から「羽生結弦アイスショー」が開かれ、県外からも大勢観客が来ているようだ。青葉山公園で全国都市緑化フェアを見回った。仙台は活気づいている。(一)

▽今年春が早かったから花の開花時期も早い。概して花の寿命が短いと感じるのは私だけだろうか。家の日陰に群生しているホウチャクソウのつぼらな白い花々を見たその翌朝、すべて消えていたのには目を疑った。一瞬、訳が分からず自然界の悪意を思ったほどだった。(近)

▽旅先で書店に立ち寄った。大型書店の中で文庫の棚を探すのに右往左往した。どのコーナーにも本を手取る人がいた。こんなところでも人口の比較ができるんだなど、初めての街の大きさを感じた。書店横のカフェで足を休める。大人の旅の贅沢な時間の過ごし方、非日常を満喫した。(和)

▽図書館へ行く時に通る好きな場所がある。大手建設会社のビルが建つ一角。よく刈り込まれたツツジとアイビーの植栽の真ん中に、細い通路がひそと隠れている。長さ10メートルほどの小道である。街中なのに人に出会うことはなく、少し秘密めく気持ちを愉しみながらいつも遠回りをしてここに来る。(佐)

文友一滴

「小さなつましいマッチ箱それ自体は火事の恐ろしさを表現してない。略々それを知るには想像力を使わなくてはならない」(池澤夏樹)の(し)終末) 想像力。誰もが自由にはたらかせることが出来、制約の無いものである。他人の想像を想像することは誰にも出来ない。作家は、作品が完成して自分の手から離れたら、それはもう相手のものだと言う。何をどのように解釈するかは受け手に委ねられる。読んだり見たり聴いたりしたのから何を想像しようかと、どこまで翔ぼうと、百人百様まったく自由。だからこそ愉しめる。

膨大なデータを取り込んで、質問者への回答を素早く作る事が出来るという生成人工知能(AI)が現実のものとなってきた。「理想的」というミヒヤエル・エンデの短文がある。いつの日かコンピュータが文学作品を書けるようになる専門書で読んだ。詩も小説もやがて音楽も人間より上手に速くできると。しかし誰がそれを理想的と認めるのか。「エンデのメモ箱」。亡き文学者の30年前の指摘が、今改めて目の前に差し出されている。人工知能は、人間の持つ想像力というかけがえないものを、いったいどのようにデータとして取り込むことができるのだろうか。(佐)

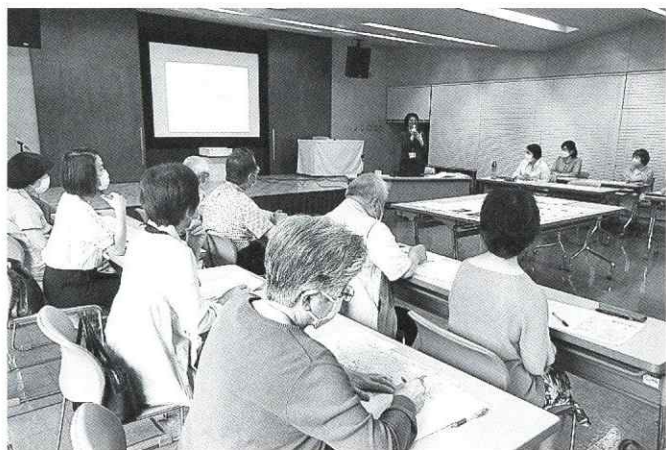
### 友の会イベント 「地図の上で文学散歩しよう」 同時代を生きた島崎藤村と相馬黒光



師として東北学院に赴任した。仙台駅前にあった「針久旅館」に宿泊した。同僚布施淡との友好的な交流があつて同じ宿泊先だった。星良は（後の相馬黒光）は幼友達だった。星良は宮城女学校を中退し、フェリス英和女学校に。その後明治女学校に入った。そこで島崎藤村の授業を受けている。

古い地図上で  
は藤村が東北学院の同僚と食事した料亭「二見亭」を確認できる。藤村はいつも和服を着ていたが有名洋裁店で背広を作った。布施淡とお揃いで通動していたのかもしれないと思うと何だかほっこりする。新調の背広姿の写真が残っており、白崎写真館で撮ったものだ。最後の転居先は三浦屋の2階だった。荒浜の波の音が聞こえたとき書き記す。今では波の音が聞こえるなんて全く考えもつかないことである。ロマンを感じさせるではないか。ここで若菜集を上梓したのはあまりにも有名である。

明治30年7月東京に帰る。仙台滞在9か月であった。辞任にあたって東北学院の職員等が料亭「梅林」でお別れ会を開いた。一方詩人の仲間たちは料亭「陸奥の園」で送別会をした。  
ある時は2泊3日で仙台から奥州街道を北へ。吉岡から東へ向かい松島の旅を楽しんだようだ。この文学館の前の道を歩いたのではないかと思うと夢が広がる。昭和12年八木山に島崎藤村の詩碑「心の宿の宮城野よ」が建てられた。40数年ぶりの歓迎会の席で、仙台はいい思い出しかないと言った。「仙台の2日」のエッセイにも記してある。この詩碑は八木山から青葉城址に、そこから藤村広場に移された。今日三浦屋の跡地近くが藤村広場になっている。広場は上空から見ると若菜集の表紙の蝶をかたどって、カラーブロックが敷かれているのがわかるようだ。  
講座終了間際に目いっぱい拡大された古い地図を囲んでみんなで見入った。残っている建物はほとんどないけれども「ここは何となく分かる」「ここは現在の○○○だ」「発見した」。赤間さんも「地図を見ていると地図沼に入ってしまう、抜け出せないくらい面白かった」と繰り返し話し話しておられた。  
聞き終えた方々からは、●ポイントを絞って聞くことができて大変良かった。  
●相馬黒光の生家は、Y M C A、甘座の裏あたりかなと思つた。●地図を間にすると、知らなかった会員とも自然に話ができよかつた。などの感想が聞かれた。明治時代の仙台を時間旅行気分楽しんで



赤間副館長ツアーガイドのもと初恋通りのお話もあった。島崎藤村の若菜集「初恋」から。  
「まだあげ初めし前髪の  
林檎のもとに見えしとき」  
仙台駅東口広場から藤村広場まで続いている通りが、甘酸っぱい名前の初恋通りなのだ。若者たちの恋愛パワースポットであるらしい。地図を片手に街中散歩はますます面白いものになるだろう。先ずは藤村広場に行ってみませんか。  
友の会の渡辺会長は、冒頭の挨拶で「みんなにも教えたくなるような、得をするようなイベントです」と話されたが、まさにそうだった。次回もどうぞご期待ください。  
6月8日開催 17名参加（一）

6月8日(木)講習室で、「地図の上で文学散歩しよう」が開催された。講師を仙台文学館の赤間副館長にお願いした。

明治33年発行の地図を見ながら当時仙台を歩いたであろう島崎藤村と同じ時代を生きて活躍した相馬黒光についての詳細を聞いた。「これまでは文人の人物像や足跡について語られることが多かった。今回、地図を見ながらの文学散歩は、時間や距離が離れていても時代が近くなる瞬間があるように思う」という言葉で講座は始まった。

### 第57回読書会

## 悲しみの中に灯るあかり

浅田次郎「歸郷」

復員兵古越省一は全滅と言われたテニアン島から生還した。彼は家に残した妻とふたりの子どもに帰るべく、信州松本の駅にたどりついた。プラットホームで立ち尽くす彼に、「このまま始発の汽車に乗ってくれ」と義兄は訴えた。その言葉の裏には、戦死の公報を受け取った妻子や実弟のその後があつたのだ。戦後の荒廃した世の中で、思いがけず出会った良き男と女の哀しくも切ない、そしてやさしい物語である。  
\* 淡々とした書き方だが、逆に胸に迫る。

戦争はむごい。  
\* 省一は死ぬまで辛い気持ちを引きずったのだからか。  
涙が溢れる切ない作品。  
\* 作者は戦争を体験していないのにその描写をする。想像力がすごい。  
\* 戦争そのものの場面が出ていないのに、戦争の酷さがよく分かる。  
\* 生き残ったことの幸、不幸を誰がきめられるか。誰にもそれぞれの人生があるのだという終わり方が良かった。  
\* 戦争で引き裂かれる男女を描いた、映画「ひまわり」を思い出した。  
4月12日 5名出席。（佐）

### 第58回読書会

## 生きることは苦しむこと、やれど

佐藤厚志『荒地の家族』

在仙の作家の芥川賞作品。親近感と誇りを共有しつつの読書会である。  
海が膨張して押し寄せ、全てのものをなぎ倒し、奪い、破壊し尽くして去って行ったあの日、後には悲しみと辛さだけが残った。それでも人は生きて日々の営みを続けねばならない。日常を丁寧に描写する筆致が、生きることに向き合うひとりの人間の姿勢を際立たせる。  
\* 植木職人は自然を相手にする仕事であり、震災からの再生とも呼応している。  
\* 書き出しが良く、入りこめた。

\* 植木職人の具体的な描写がみごと。  
\* 描写が緻密で引き込まれる。人は生き続けなければならぬのだと。  
\* このようなきが身近にあったのだと強烈な印象を受け、貴重な作品だと思つた。  
\* 愛することの難しさや、親子三世代の優しさなども感じられた。  
6月14日 新会員を迎えて、7名出席。（佐）

次回読書会は10月11日(水)14時  
井上荒野「あちらにいる鬼」(朝日文庫)  
※友の会会員は自由に参加できます。申込みは友の会事務局まで。

### 静かな興奮と少しの緊張

## 第26回ことばの祭典

6月3日「ことばの祭典 短歌・俳句・川柳へのいざない」が開催された。短歌部門には山本豊氏と梶原さい子氏、俳句部門には成田一子氏と高野ムツオ氏、川柳部門には安藤敏彦氏と雲石隆子氏を選者に迎えた。当日吟行会として行われるのは4年ぶり、78名が参加した。短歌67首、俳句68句、川柳64句が投稿された。休止していた友の会サポーター活動も、規模を縮小してはいるが今回から再開された。受付で参加者に作品応募用紙を



手渡し、出来上がった作品を受け取ってナンバーを振るなどの作業を行った。サポーターと役員は、久しぶりの活動に喜びを感じていた。  
参加者が集まるエントランスホールは、題発表を待つ興奮と緊張の静かなさわめきに満たされていた。  
午前10時、題が発表された。  
「開く(ひらく、あく)」  
もしくは  
「靴(くつ)」  
受付をすませ、作品応募用紙を手にした参加者は、一人あるいは数人のグループで、館内にそれぞれの場所を見つけ作品作りを始めた。

《ことばの祭典賞受賞作品》  
◇短歌部門  
不意打ちにうなぎ燃えゆく初夏に十七歳の世界が開く  
小林珠緒  
◇俳句部門  
開きかけ僕の心は牡丹かな  
木村陽菜  
◇川柳部門  
新しいノートを開くときが好き  
佐藤久美  
顔なじみの参加者はもちろんだが、今年若い参加者が増えた。コロナ禍の自宅時間が増えた、SNSが普及した、あるいは某番組の影響か、要因は様々あるのだろう。何であれ若い人が短歌、俳句、川柳に興味を持ち、ことばの祭典に参加してくれたことを嬉しく思った。  
(和)